

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.81

試 行 錯 誤



子どもたちは元気(タイ)



(カンブチア)

特集 JVC 活動事典

JVC 活動事典

どうやってプロジェクトを選ぶのか	2
カンブチア	3
タイ	4
エチオピア	6
ソマリア	8
ラオス	10
日本国内	11
第6回JVC会員総会 JVCの活動方針を作ろう	14
補助給食プロジェクト撤退をめぐる経過と意見	18
JVCがすすめる100冊の本(2)	23
ボランティア登場4	24

どうやってプロジェクトを選ぶのか

カンブチアで働くNGOが共同で出版した『NGOが見たカンブチア』の学習会を行った時のことである。「援助団体が政治的発言をするのはいかなものか。あえてセンチメンタリズムに徹してもいいのではないか」という発言があった。JVCがなぜこのような本を出版するに至ったのかは説明しておいた方がいいようだ。総会でも触れられたJVCの基本方針を考えるうえで参考になるかもしれない。

現在カンブチアはベトナムを後楯とするヘン・サムリン政権と、タイ・カンブチア国境にいてASEAN、中国、アメリカなどの支援を受けた三派連合政府が対立している。三派連合政府は国連の議席もあり、彼らのキャンプにはあらゆる援助物資が送られてくるが、カンブチア国内は国際社会から孤立し、国連の援助も限られている。ヘン・サムリン政権がベトナムの傀儡であるというのがその理由である。内戦やボル・ポトの残した爪あとから立ち直っていない、最も援助を必要とされる国は、国際政治の力関係のなかで無視され続けてきた。そこでカンブチアの復興のために人々とともに働いてきた西側NGOが、彼らを代弁する形で書き上げたのが上記の本だ。カンブチアの人々が最も望むのは今の平和が続いてくれることと、国土を復興させることである。そしてボル・ポトの復帰は絶対認めない。

JVCはこれまでタイのカンブチア人難民キャンプ、タイ・カンブチア国境（三派連合政府のソン・サン派キャンプ）、カンブチア国内とどの立場のカンブチア人も支援してきた。何年間かの経験から、このような膠着状態を支えているのは国際政治にあることに気がついてきた。個々のプログラムをまじめに行ってもいっとうに平和にもならず、難民の立場は変わらない。たしかにNGOは政治的な発言することはめったにない。そのことによって援助対象者が迷惑をこうむるようなことは絶対に避けなければならないからだ。だからどんな政権の下でも働くことができる。しかし、時としては黙っていることが人々をより苦しめることもある。今回の場合私たちはそう判断した。また、“政治的な発言をしないこと”

もきわめて政治的なことである。

NGOが活動するのは政治的に安定した国とは限らない。むしろ逆の方が多い。援助の手が届きにくいところとなるとどうしてもそうになってしまう。エチオピアの場合もそうだ。北部のチグレ、エリトリアには反政府ゲリラが出没し、援助物資を積んだ国連のトラックが何回も襲われた。

そのような国で活動することについて「いくら援助しても軍事費に費されてしまうのだからムダだ」とか、「かえって強権政治を補強しかねない」などと批判されることがある。反政府活動が起きているエチオピアは外国人が国内で仕事をするには厳しく、決して仕事のやりやすい国ではない。それでも50の団体がエチオピアで活動している。昨年の干ばつには前回の教訓を生かし、政府、国連、NGOが早めに手を打ったため、大規模な被害には至らなかった。飢餓が起きて援助をしても何もならないのだ。生態系の回復はひとりエチオピアだけの問題ではない。また援助団体が撤退して困るのは政府ではなく、そこに住む人々である。

NGOが活動を続けるうえでどうしても政治の壁にぶつかることがある。そういう時は、何がその人々のためになるのかを考えれば、自ずとその方法は見えてくるように思う。

第6回会員総会において、事務局のエチオピア担当をしている林達雄さんが、個人的意見と前置きしながら「今年はエチオピアとカンブチアに力を入れていったらどうか」と活動方針案を述べた。（本誌15ページ）2つのプロジェクトは長期にわたるもので資金もかかり、その上政治的に一方の政権に加担しているなどの誤解を受けやすいことで似通っている。このような困難を伴うプロジェクトを選んだのは、それらが根本的な問題解決を見すえたものだからである。

JVCはこれからどんなプロジェクトを選ぶのか、その基準となる基本方針を今後1年かけて練り上げることになった。（編集部）

カンブチアは新聞の国際面などで最近よく取り上げられるようになったが、国内の民衆の暮らしはなかなか伝わってこない。国民の90%以上が農民で、彼らがカンブチア特有の背の高い砂糖椰子(トナオト)の木々を背景に田植えをしている風景は、それが干ばつにより田植えの時期が数カ月も遅れた時でさえ、私たちの心配をよそに、ゆったりと大自然に托け込んでいるように見えた。

カンブチアは苦勞のしがいのある国である。同じ東南アジアでも、タイなどでは経済面で日本の進出ぶりに日本人の一人として気がとがめるが、カンブチアでは幸か不幸かまだそれが大きく目だっていない。その代わり、10年以上にわたる戦争とクメール・ルージュ政権の残虐行為によってもたらされたはなはだしい荒廃は未だ目に余るものがあり、これほど苦しみ続けているカンブチアの人々に対してどうして日本は人道的観点からの援助をしないのだろうか、と苛立たしい気持ちになる。

技術学校/ワークショップ

JVCは「技術学校/ワークショップ」の活動を1986年から始めたが、校舎と工場の建物の完成まで約8カ月を要し、1987年7月15日、ようやく落成式を行うに至った。習月には55人のメカニック訓練生の入学を決め、9月からは救済活動のために使われる車両の修理を訓練生とともにやってきた。

88年1月、主任技術者タック・カン氏により第一期訓練コース(3カ月間)が試験的に開始され、58人の生徒が受講した。午前中は自動車工学の理論を学び、午後はカンブチア人技術者2名と日本人技術者2名を中心にして、分解・組み立て、修理の実技を学んだ。

「まず第一に安全なやり方、第二に正しい手順を、第三に正しい計測の仕方を教えてあ

げなけりゃ」とJVCの技術者としてプノンペンで働いている馬氏は意気込んでいた。どこまでカンブチア人技術者を育てられるか、これからの課題である。

給水活動

「井戸掘り」の活動の重要性はいうまでもない。しかし、わずか5、6台の井戸掘り機械で日本の国土の約半分の土地で井戸を掘ろうというのは、先の長い話である。その井戸掘り機械も、79年以降ユニセフやNGOにより寄贈されたものである(1台はMIRCという日本の団体がJVCを通して83年に寄贈した)。しかも、必要な資材も手に入らないことが多く、JVCもその資材等の援助を86年から続けてきた。

今年3月、コンボンスプー県の井戸掘り現場を訪れた際、その作業を見ていた農村の子供たちが、外国人を見るのがめずらしいらしく、カメラを構えると大はしゃぎでわれもわれもと集まってきた。「名前は? 学校行ってる?」とクメール語で聞くと、「あたしはモーア。この娘はムノームよ」というように5、6歳の女の子が次々に友達を紹介してくれた。広々とした土地、見わたすかぎり地平線の平野を駆けまわる子供たちの表情の何と明るくのびのびとしていることか! 彼らの表情を曇らせないようにできるかぎりのことをしたいと、誰しもが思わずにはいられないだろう。

RINE プログラム

現在までに、全国19県のうち11県の中心地と5つの郡、およびプノンペン市内13カ所で「ライン(RINE)・プログラム」が進められている。このプログラムは、R(補水)、I(予防接種)、N(栄養)、E(教育)を骨子とする全国的な母子保健活動であり、保健省などカンブチア人自身の努力と、ユニセフと数少ないNGOの協力により実施されている。

JVCは87年度、ユニセフを通じてこのプログラムを支援するとともに、関係当局との交渉を行った。同時に全国各地で、母子保健に関するフィールド・ワークを行い、5歳未満児の健康状態の調査などを行った。

88年3月には、プノンペン郡に臨時のライン・センターを設立し、そこに住む約6万人を対象に、JVCもこの活動に本格的に参加した。



トラックの修理技術を学ぶ

タイ

難民キャンプ

難民救援のジレンマ——真の解決とは

あまりにも長い“救援活動”

自分たちはより程度の高い仕事をするにばかり気をとられていて、難民の人たちと辛苦をともにしようという気持ちを忘れてしまったのではなかろうか？ 本来の目的に立ち返ってみよう。それは、例えばタイ・カンブチア国境地帯のカンブチア避難民の「人間としての尊厳、基本的人権並びに人間として基本的に必要とするものが保障されること。及び彼らの自立にとって障害となる問題の恒久的解決に貢献すること」(JVC規約第3条)ではなかったか？

カンブチア避難民についていえば、彼らはJVCが最も長年にわたって援助の対象としてきた人々である。JVCの活動者のうち、いったい誰が、彼らが今でもそこに留まっていることを望んでいたであろうか？ 誰もいないはずである。彼らの人口は今や30万人にも達しようとしており、その半数以上が15歳以下の子供たちである。子供たちの多くはキャンプの生活しか知らない。食糧や水は援助の配給に依存しており、あるカンブチアの婦人は、自分たちは動物園の動物みたいだとNGO関係者に語ったという。

JVCはタイ・カンブチア国境地帯での「補助給食と栄養教育」の活動を今年3月で打ち切った。それは、その活動そのものは他の団体に引き継がれたため、カンブチア人々への援助が打ち切られたということではない。自分たちには、援助そのものが「基本的に必要とするもの」であると同時に、「問題の恒久的解決」に対立するものの一部をなしている、というジレンマがあった。UNBRO(国連国境救援機関)に資金拠出をしている国々は「保護をすると称した人々の命を、かえって危険にさらしている」ことに道義的責任を負うべきであろう。その意味で、UNBROへの大口の拠出国である日本は、なんらかの責任を果たすべきであることを、日本市民の一人としてこれからも訴えかけたい。

秒読みに入ったカオイダン閉鎖

「カオイダン・キャンプはもう閉鎖したのではないんですか？」とよく聞かれた。確かにカオイダンは昨年初め公式上閉鎖されてしま

日本語学校のパーティ



った。しかし、その居住者2万人が姿を消してしまったわけではない。彼らは、難民問題の解決方法(第三国定住、自主的本国帰還など)のどれかが実現するまで、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の保護下にあるべきなのである。

昨年11月には、今まで第三国定住のための面接対象とはならなかった難民7000人が、面接を受けることが許された。それから5カ月間で約3000人がアメリカなどを目指してパナニコム・キャンプに移動した。最終的に1万人の難民が第三国定住の可能性のないまま残されて、彼らが国境地帯のキャンプに統合されたとしても、UNHCRが彼らの保護を続け自主的本国帰還を促進することが期待される。

JVCは、カオイダンで1981年以来「技術学校」の活動を続けてきた。キャンプ内の雰囲気沈滞しているなか、この活動は将来(第三国に行くにせよ本国に戻るにせよ)役立つ技術を身につけさせるだけでなく、彼ら自身が学校を運営しているという自尊心を持たせるという目的が重要とされる。

パナニコム・キャンプは第三国定住の決まった難民のためのキャンプである。JVCは日本に定住の決まった難民に対して、日本語を教え、日本の文化・習慣などを紹介している。

1987年度は、ラオス91人、カンブチア111人、ベトナム2人の合計204人の日本定住予定者(うち生徒131人)を対象とした。日本語は、大和定住促進センターで使用している教科書と同じものに沿って指導しているので、現在では日本に行ってから継続して授業を進めてもらえるようになった。

また、オランダ、スウェーデンなど他国への定住予定者合計421人を対象に、飛行機の搭乗手続きのオリエンテーションを行った。

東北タイはしばしば干ばつによる被害を受けるが、1987年の干ばつはことのほかひどかった。雨期の始まり、6月末のひと雨で途絶え、7月8月の田植えどきを農民は雨だけを待ってジリジリと過ごした。8月の終りになってやっと降り始めたとき、干上った苗代の苗はすでに黄色く半枯れとなったり、伸び過ぎて茎を出していた。そんな苗の先を切って田植えをし、あるいは直播きに切り替えて可能な限り作付けしたものの、水不足から作付けできない田も多かった、その後も雨は少なく、すぐに乾期になって温度が下がったためもあって、収穫は例年の半分、4分の1の家庭もあった。

今回の干ばつは局地的なものではなく、東北タイ全体、さらに北部、中部とかつて経験したことのないほどの広範囲な地域で起こったことに特徴がある。雨不足は年々確実に進行しており、これは森林の乱伐など生態系の破壊にも関係があると思われる。そして、近年森林の乱伐に拍車をかけているのが、トゥモロコシ、キャベツ、ショウガなどの輸出商品作物の栽培で地力は落ちて栽培不能となり、農民はやむなくそこを捨てて新たな森を切り開く。世界経済の力関係から農民はこれら輸出商品作物の生産を余儀なくされ、その多くは日本にも輸入されて食料、食肉の飼料、工業用として消費される。彼らが困窮状況に追い詰められていくことと、私たちの生活と無縁なものではない。

かつて人々は、自然と呼応しながら農作をする力をもっていた。しかし今、押し寄せる近代に翻弄されて自信を失っている。外からくるものに翻弄されず、自らの方法に自信を持ち、生態系のよりよい循環を取り戻していく農業方法を見つけないければやがて大地は丸裸になってしまう。

奨学金活動

スラムの人々のほとんどは「その日暮し」で蓄えがない。毎年新学期になると親たちは、子供たちに制服や教材、教科書などを買ってやらなくてはならず、途方に暮れる。借金、家財の質入れ、方法がなくて学校をやめさせてしまうことさえ珍しくない。JVCはこのような経済的な理由で学校へ行けない子供たち

に奨学金を援助しており、小学校6年の義務教育を終了するまで継続している。250人中中学生23人援助しているが、できるだけたくさんの子供たちに義務教育の機会が与えられるよう、小学生を優先している。

児童の状況調査のための家庭訪問や学校訪問をする主活動のかたわら、定例の年1回の子供合宿、毎週土曜日の子供会活動、毎月1回の子供新聞発行なども行った。

JVCクロントイ図書館活動

8月に、住民の助力によってクロントイ1区に新JVC図書館が完成した。書棚が限られているので、図書は1カ月ごとに入れ替えをする。開館と同時に新聞を読み毎日訪れる青年たち、幼児を遊ばせる母親や仕事にあぶれた父親たち、絵本をみる子供たち、宿題をやりにくる高学年の子供たちなどで終日賑わう。識字教室、サッカーチーム育成など青少年活動にも意欲的に取り組んだ。

移動図書館活動

バンコク市内5カ所のスラムで、月に1回の本の入れ替えを縦糸とし、スラム内の青少年ボランティアによるミニ図書館運営を横糸として移動図書館活動を行っている。5月には国立競技場で、スラム問題のアピールのための展示とスラム対抗スポーツ大会などレクリエーションを兼ねて、エキシビションを開催した。パネル作りなどの準備を通してスラム内の結束を固め、スラム対抗競技などを通してスラム間の親睦をはかった。ナンシー・スラムでは活動の場をそれまでの保育所から住民の建設で完成したJVCミニ図書館に移した。

農村開発活動

半年にわたる他のNGOや政府からの情報収集、実地調査などの結果、活動地をブリラム県のM村に決定した。村長をはじめとする村の行政、小学校の教師たち、お坊さま、農民などと公式、非公式な協議を重ねた結果、まず、給食活動から始めることにした。公共地を使つての給食材料の生産、養鶏、養魚などは、栄養が十分でない子供たちへの食料補給だけではなく、農作業を通じての子供たちへの農業教育、村民へのモデル農場など有機多角農場として、さまざまな目的を含んでいる。

エチオピア

植林・農業による地域の復興

(グリーン・フォー・アフリカ)

女たちは自らの言葉で語り始めた

1987年度、JVCはマーシャ村において村の生活基盤再建のためにグリーン・フォー・アフリカプロジェクトを継続しつつ、60 km離れた干ばつ被災地コレブ地区において迅速に食糧配給を行い、栄養不足による死を防いできた。87年度の現場での活動の意味と成果、活動者、支援体制を振り返って見たい。

開発と救援と

● グリーン・フォー・アフリカ

①植林 マーシャ村に若木が育ち始めた。

8月に山間部の斜面と家の庭に植えた若木が根付いた。干ばつによりその生育が危ぶまれていたにもかかわらず、3月現在で75%が枯れずに残り、70 cm程までに育っている。このはげ山だらけの大地にも、ほんの少し手をかけ、家畜から守ってやりさえすれば、木が育ちうることを実感した。

エチオピアでの植林は、日本の都市の緑化とは違う。森の喪失のために流出した表土と水をとりとどし、農業基盤再建のための、村人の明日の生存をかけた取り組みである。そして今、その成否は植林技術よりも、農村たちの木や森に対する意識や土地利用のあり方により強く左右されることを確認した。87年度は、水源地域における植林・土壌保全作業の実施とともに、農業学校・小学校・家庭訪問等を通して、植林の意味と方法を指導してきた。

②母子に対する生活改善の取り組み

母親の意識と地位の向上こそが、乳幼児の死亡率を下げ、出産、子育てにおける計画性を育み、ひいては人口の増加に歯止めをかけると言われている。

エチオピアの女性の地位は低い。粉ひき、水くみ、牛糞ひろい、その他家事一般に育児と一日中忙しく働いているにもかかわらず、すぐに夫になぐられ、簡単に離婚されてしまう。常に押さえつけられ、人前で話した経験など一度もないような母親たちの何人かが、近所の母親たちを集めて、野菜の育て方や離乳食の作り方について語り始めた。

マーシャ村で母親学校を始めてから丸2年、当初、家族や隣近所に気がねしながら基本的な栄養や保健について学びに来ていた女性自

らが、今度は教え手となって村々を廻り始めたのである。こうした女性たちの改善への意欲は、日本に住む私たちにも明日への勇気を与えてくれる。

訪問指導のほかにも、小学校、診療所、識字教室と様々な場を使って、多角的な取り組みが始まった。また、離婚された女性やハンディキャップの人を対象に刺繍やカゴ編の技術を指導し、収入の道を拓く職業訓練を1月に開始した。

③その他、衛生的な飲料水を確保するための泉の保護、特に貧しい農民を対象にした種もみや役牛の貸出等、生活に関わる多方面の活動を展開した。

● 緊急食糧援助

大飢饉をもたらし、100万人の人々を死に追いやったといわれる1984年の干ばつから3年目、北部3州を再び干ばつが襲った。雨量は $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 、収穫量からみれば前回以上の被害を与えた。しかし、それにもかかわらず、今だに深刻な飢餓は出現していない。早期警報体制の下に50救援団体、国連機関、政府が地域を分担して、迅速に対応した成果である。

JVCでは1986年以来、ウォロ州ワレヒメノ県内で最も被害を受けやすいコレブ地区に対する救援活動を想定して、コレブに近いマーシャに拠点を移し、道路整備や市場価格調査を行ってきた。今回の干ばつに際しては、大雨期の遅れに速応して、7月末にはコレブ地区の作柄、水場、人々の食糧の備蓄を調査し、8月半ばには小規模ながら食糧配給を開始した。その後、十数回にわたり調査を重ね、3月までに1000トンの小麦を、簡単な労働の報酬として、2万6000人の被害者に配給した。コレブの人々に生存の機会を与えたいという目的の第一歩をとげたわけである。

だが、被災者の大半は、少なくとも88年12月の収穫期まで食糧自給の見込みがない。小雨期にあたる2月～4月にも雨が降らず、家畜のエサとなる牧草すら生えないため、農耕にかかせない役牛をも手放し始めた。また、配給された小麦を炒って食べるだけの状態がすでに9カ月続き、子供たちの病気に対する抵抗力は限界に近づいている。本格的な救援活動が必要とされるのはまさにこれからである。

活動にかかわる人々

① 日本人スタッフ

NGOはエチオピア政府機関と契約を結んで活動しており、外国人スタッフの数もこの契約により制限されている。JVCの場合、現場3人、首都1人に対してのみ労働許可がおりている。現場での農業技術者、看護婦、調整員としてそれぞれ、伊藤達雄、有本敦子、山田盛が、代表として加納妙が活動に従事した。

山田は緊急救援活動の指揮にあたり、加納はアジスアベバで食糧確保に奔走し、遂にWFPと約束を取りつけた。伊藤は植林・農業を指導し、有本は伊藤夫人幸子とともに、母子に対する教育的な取り組みを組織した。ここでの看護婦の役割は看護ではなく、もっと基本的な生活改善指導である。また、村人たちの生活全般に関わるこうした活動では、スタッフとして関わる側も夫婦という単位が望ましいことを伊藤夫妻が示してくれた。後に続く夫婦の活動者を切に求める。

② エチオピア人スタッフ

村人たちに実際に接し、彼らのかかえている問題をひき出し、それに応える形で1つ1つの活動を推進しているのは20数名のエチオピア人スタッフである。そして87年度の活動の充実には彼らの活躍を抜きには語れない。権威主義があたりまえのエチオピアで、女性や子供たちにわかりやすい言葉で語りかけることのできる元コック、エシャトーを中心に母

子に対する多岐に亘る活動が展開された。干ばつと食糧不足に苦しむコレブ地区の村々を1つ1つ歩いて調査し、実状にあった救援活動を可能にしたのはトーマスであった。また地元マーシャ出身で、母子保健や農業・植林の普及を手伝う男女が登場した。

支援体制

グリーン・フォー・アフリカ：85年緊急医療救援時に集めた資金を使いつつ始めたこのプロジェクトも、ようやく安定した支援者を獲得しつつある。ウォーク、サイクル等の市民参加型チャリティイベントに加えて、「顔の見える協力関係」を支援してくれる学校や市民グループの数もふえて来た。また、犬養道子さんが、マーシャ村での植林活動をアピールし始め、募金口座が設置された。だが、いまだに自転車操業を脱した訳ではない。現場での活動が充実しつつある今、より一層の支援を募りたい。

緊急食糧援助：飢えた子供の姿が現われる以前に、予防のための活動をアピールすることは難しい。8月末に支援を募り始めたが、反応は乏しく、12月には見切り発車で、輸送に必要なトラックを発注した。その後、一般市民・団体からの支援金が急速に集まり、極度に交通の困難なエチオピアでの食糧の輸送力確保することができた。今後も被災地の状況に呼応してアピールを続けてゆく。



婦人のための職業訓練



ソマリア

自立のための農場建設

JVCから難民主導型に

JVCは、1983年からソマリアにおいて、農業を中心とした生産活動により彼らの自立を目指すプロジェクトを続けてきた。また、生活改善のための植林や教育活動も始めた。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）やソマリア政府はもとより、10団体以上ものNGOも依然として援助を継続している。

しかし、今でも約80万人のエチオピア難民が滞留している。そして彼ら難民たちは、10年近くも外部から援助を受けてきたため、依存症に陥っている。ここでの大きな問題の一つである。

その解消に向け、彼らを取り巻く外的な状況は大きく動き始めている。まず、それらの動きを追ってみたい。

本国帰還

難民問題の解決でもっとも理想とされる本国帰還は、ソマリアにおいても行われてきた。1986年12月から再開された帰還活動で、今年1月までに約4500人がエチオピア領内に戻って行った。この帰還活動は今後とも続けられる予定であり、今年4月に実現したソマリアとエチオピアの11年ぶりの国交再開が拍車をかけると期待される。

ソマリア国内での定住

しかし、ここソマリアでの難民問題の解決にもっとも可能性が高いのは、やはりソマリア国内での定住であろう。なぜなら、彼ら難民たちのほとんどはソマリア国民と同じソマリ族であり、文化や宗教も非常に近いからである。また、ソマリア政府も彼らの定住を公式に認めており、彼らを受け入れるだけのポテンシャル、特に農地となりうる未開墾地があり余っているからである。

UNHCRの方針

さらにまた、「難民の生命維持」の援助を基本としてきたUNHCRも、「難民の自立」

に向けて方針を大きく移行し始め、難民救援のために設立されたソマリア政府の難民部局の統廃合をも提案している。これら難民部局の費用のほとんどをUNHCRが拠出しており、その削減が目的である。

このような状況の中で、JVCは以下の活動を昨年度は行った。

農場の拡張

グループ・ファーマリング方式という難民主導型に移行し、さらに56haを拡張した。既存の99haに加え、合計で155haになった。この新農場の対象者はキャンプの外に移り住んでいる難民たちで、数年以内に彼らはポンプ、ディーゼル燃料、農具などの代金をJVCに返金する。

従来建設した農場を整理すると下表になる。

既存農場の維持・改善（99ha）

ポンプの燃料購入代などに対する難民の自己負担を一層増加させ、一部の農場ではその全額を難民が負担している。

その一方で、ユニット1では、異部族混成というリスクに加え、農地の疲弊などが重なり、この農地を地元民に返却した。

植林

農場内にとどまらず、マネガイ難民キャンプにも1万本以上の苗木を配った。

その他

現金収入を得る手立てとして、水屋、パン屋、かじ屋、帽子屋を始めた難民たちに資金を貸し付けた。また、試験農場の拡大・充実、農業クラスと識字クラス、養蜂指導、養鶏指導、井戸掘りなども行った。

われわれJVCとしては、「与えるだけの援助」ではなく、彼ら難民たちの自立につながる活動を今後とも続けていきたい。



植林区

農場 (ユニット)	建設年	建設方法	対 象 者	面積 (ha)	家族数
1	1983	JVC主導	グループ・リーダーなど	14	14
2	1984		農業に関心のある者	13	26
3	1983		"	12	24
4	1986		自分たちで選出	20	32
5	1987	中間型	"	15	15
6	"	(協同農場)	"	25	64
7	"		"	20	20
8	"		"	16	16
9	"		"	20	25
				155	236

* ユニット6の家族数が多いのはこのグループの自主的取り決めによる。

ソマリア

新難民への総合的復興援助

他団体に引き渡す

既に70万人ほどの難民を受け入れていたソマリアに、エチオピア国内の社会不安と干ばつなどにより、1984年に約10万人の新難民が流入した。ルーク地区には2万6000人が到着し、その内の約1万1000人がヒラン郡ボロブルテ地区に新設されたジャボレ新難民キャンプに移された。

JVCは、ルーク地区だけでなく、このジャボレ新難民キャンプでもその建設段階から唯一の外国NGOとして活動してきた。当初は緊急援助の様相が強い保護プロジェクトを行っていたが、キャンプの状況が安定するにつれて、開発援助の性格をおびた生活環境の保持や改善などのプロジェクトに移行してきた。

具体的には次のようなプロジェクトを昨年度は実施した。

医療保健／補助給食

外来患者の診察、栄養状態の悪い乳幼児や妊産婦への補助給食、及び隔離病棟の管理運営を行ってきた。

しかし、1987年4月に出されたソマリア政府の決定に従い、6月にSRCS（サウジアラビアの団体）へこの活動を引き継いだ。

植林

難民キャンプの周囲の2区画（各々5ha 合計10ha）をフェンスで囲い、植林した。初めに手がけた5haには数種の苗木を植え、2年間にわたり定期的に水をやった。一方、後から着手した5haは、その半分に植林し、残りの区域には元来この地に自生してきた木々を保護し、一切水をやらない方法をとった。最終的には、病院や宿舍の周囲に植えた木々も合わせて、約3500本を植え、70%程が定着・生育している。

さらに、難民キャンプの各家庭に2、3本ずつ苗木を配り、彼ら難民たちが自分で育てている。全部で約7000本の苗木が必要であった。

インカム・ジェネレーティング

ロバ給水車を難民の一部に貸し、またパン屋の開設資金を立て替え、現金収入の道を示した。昨年12月までに彼らは借金をJVCに返した。水屋はその後も順調に続いているが、パン屋は、借金返却の直後に、その施設を解



苗木の世話をする

体し建築資材を売却してしまった。

家庭菜園

1987年4月の雨期の直後、133家族が家の周囲に家庭菜園を再開した。また、40家族がグループを構成し、難民キャンプの周囲に農場を作った。われわれの指導が難民たちの中に定着したためであろう。

建設

病院や宿舍の建設・修理とともに、小学校の建設のために資材の一部を供給した。

昨年9月の決定に沿い、今年4月をもってジャボレ新難民キャンプでの活動を終了し、最後まで続けてきた植林プロジェクトをアイルランドのNGOに引き継いだ（詳しくはT/E 75号）。

また現在、ルーク地区での農業プロジェクトの経験とボロブルテ地区での人間関係を生かし、ジャララクシ難民キャンプの近くで農業プロジェクトの開始に向け準備し始めた。

ラオス

婦人の生活改善

帰還難民援助の足がかりとして

これまでのこと

1975年春、インドシナ三国の相次ぐ政変の後、最も早い時期に隣国のタイへと難民を出したのがラオスであった。JVCも1980年の発足当時から様々な場所で多彩なプロジェクトを通じてラオス難民と関って来た。

- a. ノンカーイキャンプ（ラオスの首都ヴィエンチャン周辺からの低地ラオス人を収容）
西欧のNGOがやり残したような細かいプロジェクト
- b. ウボンキャンプ（パクセー・サバナケット周辺の南部低地ラオス人）日本語指導・織物・技術学校・石ケン工場
- c. バーンヴィンナイ / チェンコン / チェンカム等のタイ北部のキャンプ（モン・ヤオ等の山岳民族）トイレ設置・技術学校・伝統医療
- d. パナニコムキャンプ（日本への定住が決まった人々）日本語教育・日本での生活のオリエンテーション

以上のような関わりを通して私共が常に希求してきたことは、一時しのぎの協力でなく、当然のことながら、恒久的な問題解決に力を貸すことである。しかし一次庇護国であるタイは難民の定住を許可せず、第三国への定住も既に数年前から行きづまっている状況下では、自主帰還に希望を託す他に道がない。

幸いラオスはベトナム・カンブチアに比べて帰還が実施されており（1980-193人、81-540人、82-1069人、83-511人、84-149人 UNHCR資料）、私たちの関心は1986年後半頃から次第にラオス国内にNGOとして入り、帰還者が再定住するためのプロジェクトに活動することへ移行していった。帰還プロジェクトがより効果的に行われ、成功することが次の自主帰還に与える派及効果、ラオス政府の帰還者に対する待遇への国際的監視、外国のNGOが入ること自体が与えるタイ領キャンプ内の帰還希望者への安心等に意義を見出したわけである。

昨年6月3、4、5日の3日間にわたり、UNDPとラオPDR（人民民主共和国政府）が首都ヴィエンチャンで開催する「ラオPDRの開発に関する円卓会議」にJVCが招かれ、星野事務局長と担当の谷山博史が、国連関係



15団体の一員として参加した。75年以降、首都ヴィエンチャンで初めて西側諸国に向けて開かれた「開発」に関する会議という意味で興味深い会議であったが、日本のNGOを受入れるラオス側の意志が確認された。

会議終了後ラオス婦人同盟（LWU）より婦人を対象としたプロジェクト要請があり、その後谷山の再度の訪問（11月・2月）の結果、プロジェクトの合意を得た。

生活改善指導員の養成

JVCはLWUが建設するナショナルトレーニングセンターの前段階として小規模センターの建設（工費：41,242 USドル）に協力し、そこで行われる生活改善指導の諸プログラムにおいて、保育教育訓練にJVCスタッフ前田初江が当たる。

訓練の内容：

目的：婦人を対象に生活改善指導員を養成し

全国の特に地方の生活改善を図る

対象：全国の婦人

訓練期間：第1回-6カ月、第2回以降-1カ月（以下プログラムの詳細はT/E 79号をご参照下さい）

さて冒頭に述べた通り、JVCがラオス国内で最も希望する活動は「帰還民の再定住促進」だが、現在までのところ、ラオス外務省及びUNHCRラオス事務所はJVCがこの活動に参加することを好意的に受け止めているものの、内務省が「活動地が首都周辺でなく地方の遠隔地であるため、日本人の専門家の受け入れは時期尚早」としている。LWUとの「婦人を対象とした生活改善指導員の養成」プロジェクトを通じて、ラオス内務省にも日本のNGO-JVCに対する理解が深まり、次の段階において帰還民再定住に関わる可能性も生まれることを希望している。

今、日本社会は否応なしに国際化を迫られている。それも、物や情報の国際化だけでなく人の国際化である。アジア人出稼ぎ労働者、中国残留孤児、海外帰国子女、在日韓国朝鮮人、そしてインドシナ難民。彼らが日本社会で直面する問題は、いずれも同じ根を持つ。彼らを受け入れる日本社会が、余りに閉鎖的排他的であるために、彼らは隣人として心安く暮らしていくことができない。私たちは、定住難民に関わりながら、このような日本社会をもっと開かれた社会にする努力をしたいと思う。

家庭訪問活動

現在、活動地は神奈川、東京、埼玉の1都2県にまたがり、活動者はそれぞれ28人、6人、4人の合計38人、対象人数は、119人、17人、27人の合計163人となっている。

活動内容は、日本語指導が中心であるが、子供たちの進学をはじめとした教育問題も深刻で、子供の勉強を見ることを専門にしているボランティアもいる。また、活動のなかには、学校や自治会から配られて来るお知らせを解説したり、難民登録の延長や社会保険の手続きを手伝うといった事、さらには病気の時に病院まで付き添っていくといった事も含まれている。

学習会

ボランティアの多くは、主婦や学生、退職された会社員など、いずれも日本語を人に教えるのは初めての人がほとんどで、また生活保護や難民登録などの専門知識を持ち合わせている人はまれである。そのようなボランティアの人が定住者と関わっていくなかで直面する問題に対し、専門家からアドバイスをしてもらったりいっしょに考えていくために学習会を開催している。学習会のコーディネーターは弁護士佐藤安信氏で、「日本での暮らしの手引」をテキストに、労働、住宅、法律、福祉などのテーマで行っている。また、テーマによっては専門家を招いている。講師として、労働問題には坂本早苗さん（労働基準監督官）、福祉問題には黒川京子さん（ケースワーカー）をお招きした。

大和定住促進センター見学会

「定住難民プロジェクト」は、大和定住促進センターなどの施設から社会に出た定住者のアフターケアをしているわけだが、ボランティアから定住促進センターをぜひ1度見学したいとの要望が出され、9月5日に約20人で定住センターを訪問した。

日本の難民受け入れ状況および大和定住促進センターの役割に関する内藤所長のお話の後、日本語の授業や保育室の見学、日本語を実際に教えている先生のお話などがあり、多くのボランティアにとって初めての経験に、一様に勉強になったとの声が聞かれた。

今後も、定住難民プロジェクトに関わるにあたって知っておいた方がいい施設の見学や他団体への訪問などを行っていききたい。

アジア市民フォーラム

市民による海外協力のあり方をめぐって、3月19～21日に神奈川県小田原市で、日本全国の市民グループが集まってアジアからも参加者を招き国際会議を開催した。このフォーラムでは、定住難民も重要なテーマの1つとして位置づけられ、JVCはCYR(幼い難民を考える会)、SVA(曹洞宗ボランティア会)と協力して定住難民分科会を運営した。

フォーラムでは、定住難民問題への取り組みを①地域、②NGO、③定住者自身の3つに分けて、各々事例報告を交えて今後の方向性を探った。

また、準備段階から定住難民に関わるグループ同士の横の連絡が必要なが指摘され、1月31日にはフォーラム定住難民分科会を準備しているJVCなどの呼び掛けで、相模原市に14団体から28人の参加者が集まり、各グループの紹介の後定住難民を取り巻く問題点についての意見交換が行われた。今後もこのような定住難民に関わる市民グループ同士のネットワークづくりをしていきたい。

アジア市民フォーラム（後述）への参加希望者の多さには正直なところ驚かされた。いま、海外協力に関心を持つ市民は確実に増えている。ただ情報が余りに少なすぎる。JVCは日本でも数少ない海外に現場を持ったNGOとして、その経験と実績を広く日本の市民に訴え情報を提供していく必要がある。但し、その場合ただ声高に叫ぶだけではなく、チャリティーウォークのように楽しみながら南の国の状況を知ってもらうようなイベントも組み合わせしていく方がよいだろう。

JVC神奈川のオフィスにも少しずつボランティアが集まるようになってきた。ひとり寂しく仕事をするよりも、大勢でわいわいやりながらの方がアイデアもいろいろ出るとし、第一楽しい！ 会員の皆さん、どうぞ気軽に遊びにきて下さい。

Wai Wai トーキング

JVCの現場から帰ってきたスタッフによる、小さな報告会を何度か行った。この報告会は、後述の「アジア市民フォーラム」のプレ企画の一部として「Wai・Waiトーキング」と呼び、JVC関係では以下の通り計4回開催した。

- ① 7月14日「ソマリアからの報告」 嶋 紀昌
- ② 9月17日「タイ パナニコム・キャンプの日本語学校」 石原淑子
- ③ 10月2日「ソマリア 難民キャンプからの報告」 浜野敏子
- ④ 10月9日「タイ国境の難民は今 有効な援助のあり方」 金子一弘

チャリティーウォークかながわ（11月1日）

「歩く」という行為を通して、アジア・アフリカの苦境にある人々と連帯することを目的に、チャリティーウォークが横浜で行われた。チャリティーウォークとは、参加者が事前にスポンサーと1区間歩くごとに幾らというように約束しておき、ウォーク終了後実際に歩いた距離にしたがってスポンサーから寄付を集めるというイベントである。スポンサーに趣旨を理解してもらう行為が第三世界への関心を広げることになる。

当日は、横浜市内の公園を結ぶ約9キロメ

ートルのコースを家族連れや車椅子の人を含め約300人の人々が歩いた。実行委員会に寄せられた寄付金は、最終的に2,013,749円になりJVCに贈呈された。

アジア市民フォーラム（3月19日～21日）

市民による海外協力をいかに進め、同時にNGOをいかに活性化させるかを目的に小田原市「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム」（略称アジア市民フォーラム）が開催された。

フォーラム当日には、海外からの5名のゲストや在日の外国人を含め、当初の定員をはるかに越える500人の参加者があり活発な議論が行われた。

このフォーラムは、開催の1年以上前からNGOや神奈川の市民からなる実行委員会によって準備が進められた。従来、国際会議という数人の報告者の演説を一般参加者はただ聞くだけであったが、今回は参加者一人ひとりが充分に話し合えるようにと分科会中心のプログラムを組んだ。分科会のテーマには、農村開発、医療協力、国内定住難民、アジア人で稼ぎ労働者、熱帯林、地域からの国際化など15の異なった分野から設定した。

このフォーラムに、JVCは最初から中心的に参加した。事務局スタッフに山口が庶務、海外ゲスト対応の責任者として参加すると同時に定住難民分科会のコーディネーターをした。また星野事務局長がフォーラム実行委員会委員長を務めた。

その他

- ・ 7月25、26日「海老名青年の祭典」に参加
- ・ 8月8～11日「ピーストレインかながわ」にスタッフとして参加
- ・ 10月6日「環境教育研究会」設立に参加
- ・ 10月18日「We love Asia チャリティーコンサート」に協力
- ・ 12月8～21日「タイの障害児の絵画展」に協力
- ・ 12月20日「Let's try ボランティア」の海外協力分科会のコーディネーターとして参加
- ・ 1月19日「木幡律子チャリティーコンサート」主催

日本国内

東金農場

地域に根づくことの難しさ

地域に根づくことの難しさ

JVCの標語のひとつに「深く地域に根ざし、広く世界に結ぶ」という言葉がある。JVCはその発生の経過や現在の活動内容の性格からいって、この言葉の後半にある「広く世界に結ぶ」方の役割を中心課題にしているのであって、「深く地域に根ざす」運動については十分配慮することが出来なかった。たしかに海外の現場においては、エチオピアの村やタイのスラムなど、地域の人たちと日夜行動を共にし、地域に入りこむべく、最大の努力をしている。しかし日本の地域については、JVCが東京に位置し、いってみれば情報と物質の線上に浮遊する根なし草の状況にあるためであろうか、いずれの地域にも深く入ることが出来なかった。

そこで昨年1987年をはじめより、JVC 神奈川事務所の開設と平行して、千葉県東金市に「JVC農場」を開いた。地元の人々の積極的な協力をうけて魅力的な一軒の農家と、1.7ヘクタールの田畑や梅林などの耕地を借りた。まず、地域で「自活する事」、ものの広域的な流れにそって自分たちの生命を維持するのではなく、ある特定の土地から得られる食べ物によって生きてみよう、JVCのメンバー3人が住み込んだ。初夏の田植えや畑の開墾など順調な滑り出しの後、地域の人たちとも交流を深め、逆に地域の人たちを地域外に連れ出し、海外との結び付きをも確立したいと考えていた。しかし農業で生活してゆく難しさからだろうか、肉体労働の厳しさからであろうか、あるいは農業技術をあまりにも知らなさ過ぎたからであろうか、秋の稲の刈り入れも終り、いちおうの収穫を得た年の暮に、参加した中心メンバー3人のうち2人が農業

を続けてゆく事は出来ない」と表明した。

「農業で生活する」ことによって、「地域に根ざそう」とする試みは、ひとまず失敗した。都会人集団の夢のかち過ぎた計画であったと非難されても仕方が無い。しかし決して不可能な計画ではない。今回の場合、農業技術の未熟さから借入れた田畑面積が大きすぎたことや、このプロジェクトに参加したメンバーの長期的心構えが無かったことなどが挫折の原因と考えられる。

この間、東金の人々の暖かい御支援や、また地域外からこの東金農場の趣旨に賛同され協力をいただいた方々に心から感謝したい。JVC東金農場は基本的には、もう一度態勢を建て直して再度アタックするまで、しばらくお休みである。

今年の東金農場

しかし、決してあきらめたわけではない。今年もオリジナル・メンバーであった3人のうちの1人である松岡美奈子さんが、引き続き同じ農家に住み活動が続けている。松岡さん自身の考え方から、昨年度以上に地域の人々と密接な関係をもって生活している。地域の人たちと海外との結びつきについては、東金市の人々が自ら企画し、東京事務所に協力してゆくという態勢をとっている。

東金農場に興味のある人は、東京事務所に連絡をいただくか、東金に直接連絡をされ事前に予約を取って訪ねてください。農業で生きようと頑張っていますので、その人たちを利用するのではなく、支えるよう皆で心してゆきたいと思います。



海老名青年の祭典のバザーに参加



稲刈には大ぜいの応援団がかけつけた

JVCの基本方針を作ろう

第6回JVC会員総会が6月12日(日)文京区民センターで行われた。雨のため午前中の足出は悪かったが、午後からは新旧の会員がつめかけ、総会は例年になく盛り上がりを見せた。

海外のプロジェクトは短期の救援活動からより長期なもの、開発的なものに移行しつつある。限られた資金のなかでJVCは今後どのようなプロジェクトを選びとっていくのか、その指針となる基本方針を話し合うため、拡大執行委員会を行うことが合意された。

分科会(10:00~12:00 AM)

当初はタイ、インドシナ、アフリカ(エチオピア・ソマリア)、国内と4地域に分かれ活動の現状について話す予定であったが、人数が集まらなかったのが急遽全体ミーティングに変更となった。「どうして第三世界に関心があるのか」、「なぜJVCに関わったのか」ふだんはあまり話す機会のない会員同士が知り合ういい機会となった。

総会(1:30~4:30 PM)

「コミュニケーション不足にならないように議論を深めたい」という岩崎代表の挨拶の後、総会議長として執行委員でもある岡本厚さんが選ばれた。

次に会員状況について事務局の加藤から5月末日現在で758人の会員がいることが報告された。昨年度よりも41人少ないが、これは前回の総会で「1年以上会費を滞納している人は退会とみなす」ことが確認されたため、会費収入は昨年よりも増えている。

87年度活動報告 — 鶴田三芳

JVCは海外において主に2つの活動を行っている。1つは緊急救援及び短期の活動。もう1つは開発もしくは長期の活動である。その比重がここ1~2年変わりつつある。財政面から見ると、1985年度の開発関係の支出は28%だったのに、87年度は62%にな



った。この流れはかなり必然的なものだ。エチオピアの場合緊急救援で入ったが、1年後現在のプロジェクトを選びとった。

また87年度の特徴として国内活動に力点を置いたことがいえる。横浜にJVC神奈川のオフィスを設けたこと、東金農場による地域の人々との交流、小田原で行われたアジア市民フォーラムへの参加などである。『JVCアジパル病院』、『NGOが見たカンパチア』などの出版も国内の人々への働きかけといえる。

決算報告 — 加藤志保

エチオピア緊急救援のため事業指定寄付が増えた。エチオピアに関しては、新たに犬養道子みどり一本運動の支援を得ることができた。寄付金の20%を運営費に回させていただいているが、それを事業費の繰越金からその他の項目に入れた。なお支出は予算どおりである。

<質疑応答>

石森 豊 東金農場の収支決算はどこに含まれているのか。

— 東金農場にはソマリアの農業にかかわる研修実験農場の性質をもって開設したので、予算もソマリアの農業プロジェクトの試験研究費というところに含めて計上した。(加藤)

石森 豊 東金農場の目的は農業による自給と地域の国際化をはかるということだったと思うのでこれは別会計にした方がよいのではないかと。

— 御指摘のとおりである。東金農場支援のための

収入は皆無に近く、収支を独立して扱うことができなかった。しかし方針としては別立てにした方がよいと思う。(星野)

村田広平 資料にはないが、アフガン難民の治療をどういういきさつで日本で行ったのかお聞きしたい。
— これはJVCが組織的にかかわったのではなく、私がジュネーブのUNDROの会議に出席したところ、ICMから頼まれたもの。個人的に国際医療学会や城西病院と連絡をとった結果、日本国際親善厚生財団が引き受けた。現在アフガン難民の子供が城西病院で手術を受け成功している。海外で実動している日本のNGOが国際会議にでかけることはあまりないので、たまにJVCが行くと何でも頼まれてしまう傾向がある。(星野)

永岡宏昌 表の見方について教えてほしい。人件費が事業費とプロジェクト管理費の両方に分かれているが、それはどうしてか。

— プロジェクトに直接関わる、農業技術者や看護婦などの人件費は事業費に入れている。しかしパナニコムのように1人のスタッフが日本語を教えたり、渉外・管理を行う場合はプロジェクト管理費に入れた。(加藤)

議長 次回からは決算報告ができるだけ早めに出ていることと、表の見方についての注意書きなどを書くことをお願いしたい。

以上の討議の後、87年度の活動報告・決算報告は満場一致で承認された。

活動方針案 — 林 達雄

JVCは個々の意志の集合体として動いているので“これがJVC”というものが無い。それぞれのプロジェクトがどういう意味を持つのか、客観的に評価しあわなければならない時点に来ている。それで私なりにJVCの活動方針について述べてみたい。

JVCの活動は難民への緊急救援のプログラムから始まったが、しだいにそのような状況が起こることを予測し、予防することを学んできた。そしてより本質的な問題解決の糸口となるようなプロジェクトをめざすようになった。そこで私は今年度はエチオピアとカンブチアに力を入れることを提案したい。

エチオピアの場合、これまで女性たちは虐げられてきたが、JVCが生活改善指導するなかで自分たちの言葉で語るようになり、自ら生活改善を始めた。本来は生態系の回復が目的だが、そのためにはコミュニティが強くならなければならないし、個人が力

をつけなければならない。個人を強くしたという点でこのプロジェクトは評価できる。

カンブチアは国際社会から孤立し、JVCはカンブチアと日本をつなぐ唯一のパイプになっている。JVCがこの活動に取組んだのもインドシナ難民問題の1つの解決策として選んだからだ。カンブチアの人々の側に立ち、国際政治のなかでもどういう平和的解決があるのかを訴えている。そういう意味でも非常に評価できる。

このようにプロジェクトは短期的なものからより長期なものに移行しているが、財政は短期的プロジェクトから得たものに負うところが大きい。このままでは長期的プロジェクトを維持できない。日本人たちに我々がやっていることの意味を伝えていかなければならない。今年はどういう形でプロジェクトを評価し、選んでいくのか討議する年にしたいと思っている。私の提案に対して皆さんの積極的な意見や反論を求めたい。

88年度活動計画

タイ・難民キャンプ — 古西 勇

タイ政府はカオイダン・キャンプの閉鎖を決定したが具体的な日程は決まっていない。第三国へ行ける人は行き、そうでない人は国境のサイト2の南に移されるのではないかと。JVCの活動内容はカオイダンもパナニコムも難民がいる限り変わらない。

タイ地域開発 — 岩崎美佐子

これまでスラムの活動は教育中心だったが、NGOのまったく入っていないスラムに入り、どういう問題があり、どういう解決法があるのかスラム住民とともに考えてゆきたい。

カンブチア — 古西 勇

井戸掘に関して昨年までは資金援助しかしてこなかったが、今年からJVCも積極的に関わる。技術学校/ワークショップ及びRINEプログラムもこれから本格的活動に入る。

ソマリア — 鶴田三芳

援助から脱しようとする難民たちにこれから積極的に支援していく。ルーク以外の地域でもグループ・ファームング(共同農場)を計画している。

エチオピア — 林 達雄

昨年から行っている緊急救援は、干ばつの状況しだいでプロジェクトを継続するか打ち切るか決まる。自然破壊は社会的な原因の方がより深いことを認識した。そこで今後は教育的側面に力を入れる。

ラオス — 星野昌子

JVCは一貫としてラオス難民に関ってきた。所期の目標どおり、帰還難民が定着するためのプロジェクトをやったかったが、内務省の許可が降りず、まずラオス側から要請のあった婦人生活指導員養成プロジェクトへの協力から始めることになった。

国内活動 — 山口誠史

定住難民プロジェクトに関しては難民(ラオス人)による電話相談を行う。また活動のノウハウを蓄積し共有化するためハンドブックを作成している。

JVC神奈川ではすでにエチオピア・キャンペーンを実施し、その一環としてスタディツアーを行う。

予算説明 — 加藤志保

WFPとの契約において行われていたノンチャンの補助給食を閉じたので、それに伴い補助金収入が減った。そのかわり本格的な活動が始まったカンブチアやラオスの新プロジェクトが加わり予算は昨年と同規模である。

<質疑応答>

秋山忠正 エチオピアのような強権政府の下で活動するのはザルで水をすくうようなものだという論調がある。そのような意見に対する我々の考えをきちんとしておいた方がよい。岩崎さんや林さんはどんなふうに考えておられるか。

— エチオピアの状況には問題があるが、身近なところから自分を問いただすことの延長線上に改善がある。そういうことから自分たちの仕事に関しては自信がある。しかし活動を検証することは必要だ。(岩崎)

秋山忠正 私は全てのエチオピア人を救うなどと大それたことは考えていない。現政府が何であろうとコレブ地区の3万人が助かれれば我々の使命は果たせると割りきっている。

竹内俊之 さきほど林さんがJVCのプロジェクトをどうやって選んでいくかということをこれから論議していきたいとおっしゃったが、一般の会員をまきこんで議論の場を設けるというような具体的に案はあるのか。

— まだ執行委員会や事務局内部で話をするという段階で、具体的な計画はない。(林)

竹内俊之 一般論としては議論を深めたいとおっしゃって、具体的には何もないとなるとちょっと混乱してしまう。

— T/Eの誌上を通して皆さんの意見を聞こうとい

うことになっているので、執行委員会などの内部にとどめておこうというのではない。(林)

石森 豊 具体的にどうするかが大切だ。スタッフ以外の者が話し合いに参加できる場を設けていただけないか。私たちは国内運動を盛り上げるために「井戸端会議」というグループを作った。できるだけ事務局とやっていきたいのだが。

— 日本人は徹底的に討論するが「がんばってね」で終わってしまう。らっきょうの外の皮が内側に向かって「どう考えているのか」と向かうのではなくて同じ立場で考えたい。やりたいという前提があって参加しなければ本物ではない。今度カレンダーを作ったが、その販売など必要とされる仕事は数多くある。(岩崎)

議長 長期化するプロジェクトを国内で支えていく体制をどうやって作っていくかという点については、執行委員会などで議論をつめていく。そのなかにカレンダーの問題や、財源、国内へのフィードバック、それを支える人的体制も出てくるのではないか。

室 靖 ここで提案だが、執行委員でない人も参加できる拡大執行委員会を開いてJVCの基本的な問題について再検討したらどうか。

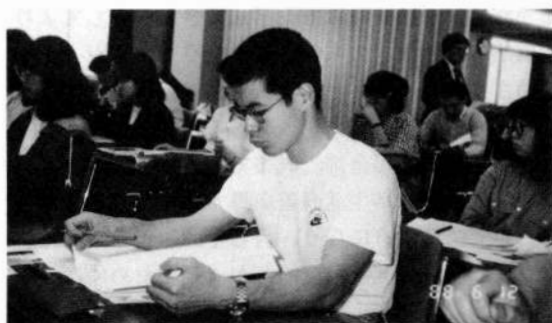
— 今後のJVCの取り組みについて執行委員会で話し合い、それから機関誌に載せることになっているが、それは基本的原則で長期的色彩が強い。具体的ですぐにというのなら、拡大執行委員会で討議するというのは大変いい提案だ。(岩崎)

議長 それでは執行委員会でその拡大執行委員会の日時、場所を検討し、改めて機関誌に載せてはいか

がか。

— 以上の議長の提案は満場一致で承認され、88年度活動計画、予算案も承認を得た。

引き続き役員の選任に移り、留学などの理由により辞意を表明していた佐藤安信さんと丹羽秀夫さんに変わり、武田昌邦さんと鷲津邦男さんが監査委員に選ばれた。



1987年度決算報告書

収支計算書

(自 1987年4月1日 至 1988年3月31日)

科 目	支 出 の 部		収 入 の 部		(A)/(B)%
	1987年度 金 額 (A)	1986年度 金 額 (B)	1987年度 金 額 (A)	1986年度 金 額 (B)	
事業費	260,727,059	270,622,085	95,832,437	131,643,408	72.8
管理費	33,994,977	35,560,871	166,739,183	96,163,474	173.4
調査費	1,063,594	0	7,382,955	8,862,450	83.3
小 計	(295,785,630)	(306,182,956)	5,447,483	3,812,214	142.9
当期収支差計	△ 17,719,986	△ 62,815,863	812,071	658,805	123.3
合 計	278,065,644	243,366,093	1,851,515	3,226,742	57.4
			278,065,644	243,367,093	114.3

1988年度予算書

収支予算書

(自 1988年4月1日 至 1989年3月31日)

科 目	支 出 の 部		収 入 の 部		構成比
	金 額	構成比	科 目	金 額	
〈事業費〉			〈補助金収入〉	(54,275,667)	17.2
(1) 西崎憲司記念技術学校	8,290,000	2.6	U N H C R	54,275,667	
(2) パナニコム日本語学校	2,915,789	0.9	〈寄付金収入〉	(252,400,000)	80.1
(3) 地域開発	6,861,318	2.1	個 人	29,400,000	
(4) 農業による自立促進	50,557,771	16.0	団 体	223,000,000	
(5) 新難民への総合的復興	413,081	0.1	〈会費収入〉	(6,000,000)	1.9
(6) 総合的復興援助	48,590,000	15.5	〈機関誌購入料収入〉	(1,000,000)	0.3
(7) 緊急食料援助	84,700,000	26.9	〈その他の収入〉	(1,563,879)	0.5
(8) カンブチアの人々への総合的人道援助	43,568,000	13.8			
(9) 定住難民	6,575,000	2.1			
00 人材派遣	2,613,354	0.8			
01 生活改善指導員養成	10,968,390	3.5			
〈管理費〉	32,686,843	10.4			
〈調査費〉	1,500,000	0.5			
〈予備費〉	15,000,000	4.8			
合 計	315,239,546	100.0	合 計	315,239,546	100.0

補助給食プロジェクト撤退をめぐる経過と意見

JVCは88年の3月をもってノンチャンの補助給食プログラムから撤退した(T/E 77号)。そこに至るまでにはさまざまな意見がとびかい、かなりの紆曲曲折があった。

まず、否定的な意見があった。「緊急救援が終ったのだから補助給食は見なおすべきである」「西側の援助が大量に国境に注がれる一方でカンブチア国内はまったく無視されている。国内はいつまでも復興がままならず、キャンプがあることで彼らをひきつけているのではないか」「難民を出さないためにもJVCの力をカンブチア国内に向けた方がいい」「慢性的に活動続けることに意味があるのだろうか」「援助のための援助はするべきではない、JVCが引くことで現状へのインパクトを与えることができる」。一方継続に賛成する意見もあった。「援助とは劇的なものでなく日々の仕事をくり返すことにある。それが難民のためになるのなら続けるべきだ」「私たちがいることで彼らの支えになっている。誰かがやらなければならないことならJVCがやった方がいい」「カンブチア人と友だちになれた。やめたくな

い」「将来難民の自主帰還が行われるまで活動を続けるべきだ。それが難民救援ではないのか」

このプロジェクトがJVC全体で見直されるきっかけとなったのは、サイト2北部の補助給食をJVCが単独でやらないかというUNBRO(国連国境救援機関)の提案が出されてからだ。そうすることで、いくつかのNGOが同じ区域で同じプロジェクトを張り合っていくというおかしなことが改善すると思われた。結局その提案は以下に述べられた経過をたどり実現しなかったが、それを契機としてこのプロジェクトに対しJVCはどう取り組むのか、考えざるをえなくなった。東京でもタイでもなかなか意見はまとまらなかった。何度も決定が覆えされた。その間にタイ人のスタッフは他団体に移り、人材の補充がきかず結果的にJVCは引かざるを得なくなった。

JVCは何年間もこのプロジェクトに関わってきたが、根本的な問いかけがないままにプロジェクトを続けてきてしまった。真の解決はどこにあるのか。以下の4人の文章は、遅ればせながらこのプロジェクトとJVCの決定に関する意見と感想である。

実現されなかったUNBRO の申し出

JVCタイ代表

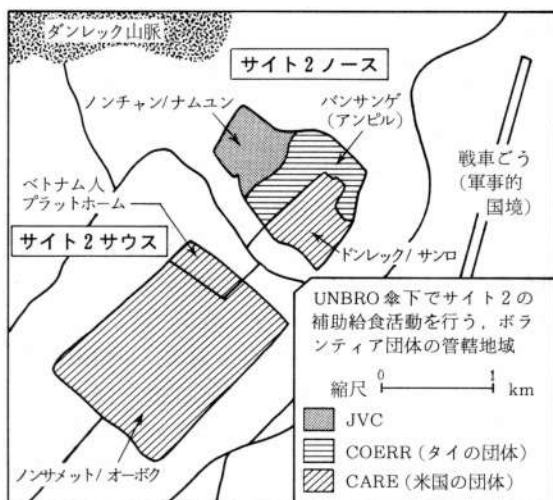
ボンピモン チャイブーン

JVCの補助給食プロジェクトが最初にその活動をタイ・カンブチア国境で始めたのは、ウボン・ラーチャニー県のナムコンで、1983年の2月からである。その後1984年1月より今日に至るまで、この活動はノンチャン(サイト2)に移され、5年におよび行われてきた。妊産婦、3歳以下の幼児、そして栄

養不良の人々を含む難民の健康増進を計る目的のために補助給食を提供してきた。このプロジェクトでは日常生活に応用できる保健教育や病気予防の知識を難民に伝えることも行った。なおこのプロジェクトの資金はWFP(世界食糧計画)とUNBRO(国連国境救援機関)によるものである。

JVC以外でもサイト2において他の民間2団体が同様のプログラムを行い、活動地域を分割したり、受給者の数を分けあっていた。これらの団体は資金の出所が同じであるにもかかわらず、独立してプログラムを扱っていた。

同一地域に3団体が活動するということは、難民にとって最高の利益をもたらすものであるべきだが、事実は難民の間に混乱と3団体の比較を作り上げて



配給カードをもらう妊婦たち

しまった。その上統一が乱れバラバラになってしまったので、JVCはこの状況を改善することを望んでいた。

JVCの希望が実現しそうになったのは、1987年6月上旬、UNBROから北部サイト2での補助給食を単独でやらないかともちかけられた時である。この申し出は1地域には1団体で統一するというJVCの目標に沿うものであり、満足の行くものだったので喜んで受けたいところであった。

JVCはWFP/UNBROがどのNGOにその任を任せてもその申し出を受け入れるつもりだった。どのような形にせよできるだけの支援はするつもりだったが、それは私たちの目的が最も有益なものを貧しい人々に提供するという点にあるからだ。しかしWFP/UNBROの提案は資金と活動両面への支援削減という理由から、他の2団体にとって喜ばしいものとはいえなかった。この決定に反対する争いが1987年の終りになるまで何度も起こった。その間利益を失う他団体よりJVCは圧力をかけられ、そして最終的には私の考えの及ばない多くの理由において、JVCへの申し出はとりやめになり、何の変更ももたらされなかった。

事は変わりJVCはプロジェクトを終了する申請をしたが、これはJVCの活動の立脚点が自分の利益を度外視して難民を援助するところにあるのだと表明するためであった。JVCは名声のための活動で他団体と競争するつもりはなかった。このような理由からJVCは自分たちの立場を訴え、他の2団体にも彼らの考え方を表明するように勧めた。さらにJVCは、終着点である難民の自主帰還や再定住プログラムなど、もっと広い視点での活動に意味を見い出

していた。

以上の理由によって私はこのプロジェクトの終了を1987年11月のJVCタイの総会において支持した。しかし心の奥底では、このプロジェクトを行うことでわれわれに希望を託すしかやり場のない難民に、多大な貢献をしているということもわかっている。私が唯一願うのは、他の団体もJVCが行ったように実り多く価値ある活動をもたらせてくれたらという事である。

補助給食プロジェクトへの 疑問とJVCの選択

元補助給食プロジェクト・コーディネーター

テリース カオエッティ

JVCは私と同様1980年に、東南アジアからの難民のために活動を始めた。この頃世界は難民の状況に衝撃を受けていた。これらの人々の基本的ニーズは非常に明白で、援助はわかりきった返答であるように思えた。たくさんのボランティアが姿を見せ、無数の寄付者による多額の援助が集った。2、3年の内に急を告げる非常事態は終ったが、いまわしい難民キャンプが50万人近い人々の家となった。

私はタイ・カンブチア国境での残虐行為についてや、アメリカや中国をはじめとする他のアジアと西側諸国が、いかに不正行為に貢献しているかを何ページにもわたって述べるができるが、しかしそれは皆さんの今後の学習のためにとっておく方がい

と思う。ここでは最良と思われる援助のための努力と、これに応じてJVCが下した決定に対して述べてみたいと思う。

プロジェクトの見直し

JVCは、補助給食を妊産婦、3歳以下の子供、そして栄養不良の人々に提供してきた。私がこのJVCプロジェクトに参加したのが1985年の10月で、アメリカとタイ国において、いくつかの難民救援団体の活動した後のことである。現場にいて人々の間に入っていったり、この世界の“持てる者”と“持たざる者”の間に広がりつつあるギャップを自分が埋めていると感じることは、非常に奮い立たせ、やりがいのある仕事であった。不幸なことに年月がたち、私は私自身と救援団体が本当は何をしているのかと疑問を持ち始めた。

1986年の終り頃にNGOとUNBRO（国連国境救援機関）の職員が補助給食プログラムの継続の必要性に疑問を呈し始めた。補助給食は緊急事態の間、弱っている人々が栄養不良を克服するために用意されたものである。しかし、いつ緊急事態が終るのだろうか。いつ私たちは人々の間に自立を促し、無力な難民という恥ずべき立場を軽減できるのだろうか。

1987年の初めにはすべての家族を含めた基本的食糧を増やすという案が出された。補助給食は段階的に減らし、最終的には栄養不良と確認されたものと、食事療法が必要な者のみとするものである（現行のシステムでは、身長110cmの女性を数え、彼女たちの配給量に2.75を掛けたものが家族の食糧となる）。このやり方は、すべての家族に十分な食糧配給量をもたらす、家族が必要とする栄養を決定する責任を彼らに帰した。またこのやり方は“女と子供を一番多くかかえる者＝もっとも食糧の多い家族”という等式を終らせることができる。

何回も話し合いがもたれた後、基本的食糧の増量（量的にも質的にも）、すべての人々への均等な配給、そして現行システムを改善するための補助給食の段階的削減などが全員一致で合意された。また、もう一つの合意事項として、補助給食の段階的削減は徐々に行われなければならないということがある。基本的食糧が改善される一方で、補助給食は従来どおり妊産婦と栄養不良の人たちに与えられるが、それに対し、給食を受けられる幼児の年齢資格を、1988年には2歳以下、1989年には1歳以下にすることが提案された。これらの変更は原則として同意され

ているが、実際にどのようなやり方で施行するかとなると合意できていない。

誰のための援助か

現在3つのNGOは同一の補助給食を同一キャンプ（サイト2）で行っている。その1つがJVCである。同じキャンプ内で3団体が独立して独自の補助給食を行う必要があったことは一度もなく、もし受給者の数が減ればよりそうである。

このような理由から1987年6月に、UNBROからサイト2の北半分の補助給食をJVCが行わないかという申し出がなされた。JVCのスタッフ（難民も含む）は、上記の提案を支持し、この誘いを受けることに同意した。しかし、これは他の2団体のプロジェクトとスタッフの削減を意味した。したがってこの案は歓迎されず、実際は強硬に反対された。1987年の終わりになっても、変更が望ましいという事実を無視し、2つのNGOは自分たちの存在を主張し続けた。どのNGOも自分たちの活動がこれ以上必要ではないとか、適当ではないと認める気持はなかった。

これは8年以上も前の緊急時に施行されたプログラムが基準になってしまっているということなのだろうか。それゆえ、私自身前にも増して、他団体に“ここでわれわれは何をやっているのか？そして誰のために？”と尋ねる時だった。

1987年12月、JVCは（私の全面的支持とともに）、より公正で自主的な食料配給を行うことで、タイ・カンブチア国境でワナに陥っている人々がよりましな生活を送るために、その地での補助給食活動から撤退することにした。これは、われわれが悲劇的かつ沈滞する難民の状態に背を向ける決定をしたという意味ではなく、どちらかというと、現状への適切な変更を考慮したということである。JVCは緊急救援の段階で、弱い傷つきやすい者に奉仕するというその目的は達成し、今は彼ら自身の手に生活の責任をもどす働きをしている。最終目標は援助ではなく、平和的な本国帰還を確実にすることである。

JVCは今でも技術学校をカオイダン・キャンプ（タイ・カンブチア国境沿い）に、またいくつかのプロジェクトをカンブチア国内に持っている。JVCはタイ・カンブチア国境の救援や将来の難民帰還の援助が必要なことは充分承知している。それらが実行されるための適切な方法を見つけるよう前向きに考えているのだ。（1988年2月）

継続を希望したが

栄養士
前野 博美

「あなたは日本人だから、お金のことは考えなくてもいいから、楽だね」

タイ人のスタッフに、そう言われ、複雑な心境になったことが何度かあった。どうしてこの活動に関わるかと聞いたら、多くのタイ人が収入のためと答えるだろう。では、自分はどうか？

東西問題や、国家間の複雑な利害関係の中で、その犠牲者である難民達と関わることは、私としては日本ではつかめなかった自分の有在意義が探せるような気がしていた。何だ、ということは、えらそうなことを思っても、私も自分のためではないか。今さら、きれいな言葉を並べても仕方がない。私だって自分を救うために、JVCの活動をしてきたのではないか。

緊急時に設けられる補助給食が、何年も経た現在あの狭い場所に、3団体が同じことをしているというのは合理的ではない。基本配給の増加に伴い、補助給食の対象者は減少しているのだから、なおさらである。

しかし、活動を継続していくことは、国境側のクメール人と、直接関わっていくことができる。撤退することの意義、継続することの意義…。どちらの側面で考慮すればいいのか。現地でもミーティングが行われた時、私は続けた方がいいという意見だった。しかし、それは正直に言って、前述の2つの面を主に考えたのではなく、私個人がもう少し関わっていたかったからである。

結局、JVCの活動は終了したが、まだもう少し続けたかったと今でも思っている。が、とにかく、現在とても情なく思っていることは、継続することの意義を、撤退する意義以上に、強く打ち出している基盤が私に無かったことだ。クメール人と友達になれた、楽しくやっていたぐらいでは、惰性的、マンネリと言われても仕方がない。そこから発展させて、組織の中の自分、難民の中の自分、個人としての自分という違った側面から価値観なり、意義なりを見付けていく努力を怠っていたのだ。

「翼があれば、好きな所へ飛んでいけるのになあ」

と、笑いながらつぶやいた人たち。JVCは国境から撤退しても、今もあの人たちはあの狭い場所で暮らしている。状況は変わらない。この一年間、私はただそういう人たちを見てただけなのだろうか。

一年を通して学んだこと、いろいろなことに対するわだかまり、様々な疑問、どうしようもない後悔、情ない思い…それは、これから自分が生きていく上でしばしば思いだされ、湧きおこってくるだろう。私にとって本当の意味での活動は、むしろ終わりではなく、始まりであるような予感がする。

撤退をかけてやらなければ ならなかったこと

元補助給食プロジェクト・スタッフ
会社員 蓮尾 慶治

国境における問題と改善策

タイ・カンブチア国境にいるカンブチア難民のほとんどは本国帰還を望んでいるが、そのためには多くの障害があり、現時点ではほとんど不可能になっている。キャンプを支配する三派ゲリラとタイ政府が難民とゲリラを離すことを認めず、キャンプで援助を行っているUNBROはそのような機能を有さないからである。

本国帰還を望む人のなかには、ベトナム軍がいなくなり、カンブチア国内が平和で安定しなければ戻りたくないというものも多い。しかし、現在の国内状況でも戻れるなら戻っていく人もかなりいるだろう。そのような人々が本国へ戻れるようにするには、まず彼らをゲリラから切り離し、本国帰還させる機能のあるUNHCRの保護下に置くことである。

また国境の難民キャンプの人々にとって最大の問題は人権保護だが、タイ兵やクメールゲリラ兵から加えられる暴力から人々を守るためにも、彼らをUNHCRの保護下に置き、国際的監視を行う必要がある。

最近になってから様々な問題点が改善されてきた。キャンプ住民に対する人権侵害をひんばんに引き起こして問題になっていたタイ兵の質を向上させることを目的として、新たにDPPU(Displaced Persons Protection Units)の設置が決定されたり、アンパランスな食糧配給体制が変わり、全員に同じだけ食

糧が行き渡るようになった。また、援助機関がキャンプに立入ることを認めず、援助が軍隊でなく一般人に届いているかどうかの監視ができなかったクメール・ルージュ支配下のキャンプへの援助が取り止められた。これらはキャンプの現状が外部に知らされたことによって明らかにされ、圧力がタイ政府、UNBROにかかってきたことによるものと見られる。

JVCの撤退に対する評価

このような状況下でJVCが国境から撤退することによる影響は、さほどないと思われる。なぜならば、状況は改善されつつあり、JVCはそのために何ら役割を果たしていないからである。援助を減らすということに関しては、その先鞭をつけたともいえるが、必ずしも援助団体が1つ減ることが援助を減らすことにつながるとはいえず、この点自体が状況改善のためのさほど重要なポイントにはならない。

むしろいくつかの悪影響の方が予想される。最大の援助国である日本の唯一のNGOとしての役割を果たさなかった、カンブチア国内と国境の両側で援助を行っている唯一のNGOとして将来の来たるべき本国帰還の際の橋渡し役など他団体ではより困難な役割を果たせなくなる、JVCのカンブチア問題への取組みがヘン・サムリン政権の支持との誤解を受けやすい、JVCが突然止めることによって援助対象者のクメール人が困惑して不信感まで抱きかねない（UNBROや他団体についても同様）、などである。

あまりメリットがないものになってしまったのは、撤退の条件、撤退までのプロセスのまずさが原因となっている。

最初に撤退を表明するにいたった第1の理由は、3団体で行われていたサイト2北部の補助給食を全部JVCに任せるとUNBROがいったん決めたにもかかわらず、プロジェクトを減らされる他団体の反対により、結局現状維持となったことである。しかし、補助給食を1つの団体が請負うことは、撤退をかけて実現させるほどのものとは思えない。

最終的にはこのような理由で撤退するという方針は撤回したようだが、今度はスタッフがなくなってしまい続行できなくなってしまった。つまり撤退を現状打開の最後の手段として使うどころか、単に人材不足でプロジェクトを続けられないことになってしまったのである。しかも国境での活動の是非について事前に真剣に討論された結果としてでなく撤退してしまったことは、今までの活動自体を無意味

なものにしてしまうことである。

私としては、現状を打開し改善する最後の手段として撤退を表明することには賛成であった。ただ、JVCが止めると言って状況が変わるはずがないので、いわゆる背水の陣で撤退をかけて様々な活動を開始するのが条件であった。

撤退を表明する主な目的はキャンプの人々の人権保護である。この問題は、以前から関係者が憂慮していたことであった。これが87年になり公式の場でようやく討議されるようになった。しかし、国際機関、タイ政府、NGOによるCCSDPT会議でこの問題を話し合った結果は、UNBROの活動はこの問題には関係ない、つまり何もできない、やらないということであった。この方針を変更させるにはJVCの力ではまず不可能であろう。しかし、UNBRO、UNHCRそしてタイ政府への最大の援助国の1つである日本政府を動かし、他国と足並みそろえて動けば、可能性はあるのではないだろうか。JVCが撤退を表明しなくともそのような働きかけはできるだろうが、撤退をかけた方が政府に強くアピールし、それよりも今までそのような活動をしていなかったJVC自体に活動を開始させるきっかけを作るのに良かった。

今後の取組み

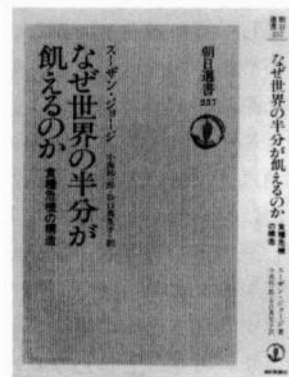
結局JVCは撤退してしまったわけであるが、まだやるべきことで離れていてもできることがある。カンブチア問題への取組みとして最も重要なのは国内再建であろう。しかし、国境の人々に対しても同時に活動を続けるべきである。

今後の活動としては、国境の現状を日本に知らせ、状況を改善するために日本政府を通してタイ政府や国際機関に圧力をかけるよう働きかけるということである。カンブチア問題は非常に政治的である上、日本の役割も大きいことから、国内と国境の両方からこの問題に直接深く関わっている唯一のNGOとして、JVCは日本国内でのロビー活動を避けて通るわけにはいかない。JVCがやらねば、誰が中立的な立場で、国内と国境の一般のクメール人の声を反映させることができるのだろうか。

* 3月、4月とあいついでタイ・カンブチア国境を訪れたR・I・J(Refugee International Japan)のジル・ニルスさんとJVCボランティアのアイネス・バスカビルさんは、「JVCの決定は正しかった。他のNGOも自分たちの活動を見直す時期に来ているのではないか」と報告している。

JVCがすすめる 100冊の本 (2)

第 三 世 界 南 北 問 題	軍縮の政治学 なぜ世界の半分が飢えるのか 反核と第三世界 南から見た世界 貧困の文化 南北問題 豊かな世界、貧しい世界 スラム民衆生活誌 自立する第三世界と日本	坂 本 義 和 スーザン・ジョージ 伊藤成彦、井上ひさし、大江健三郎 江口朴郎、岡倉古志郎、鈴木正四 オスカー・ルイス 西 川 潤 チボール・メンデ ホルヘ・アンソレーナ、伊従直子 川 口 侃	岩 波 新 書 朝 日 選 書 岩波ブックレット 大 月 書 店 思 索 社 NHKブックス サイマル出版会 明 石 書 店 日本経営出版会
平 和 人 権	虐殺はなぜ起きたか 現代の差別と偏見 世界人権宣言ってなに 暴力と平和 人種の差別と偏見 日本の生き方と平和問題 平和と人権	小 倉 貞 男 鈴 木 二 郎 レア・レビン 坂 本 義 和 新 保 満 岩波書店編集部編 日本平和学会	P H P 新 泉 社 部落解放研究所 朝 日 選 書 岩 波 新 書 岩 波 書 店 早 大 出 版 部
国際化	地域からの国際化 世界は日本をどう見ているか 日本をめぐる文化摩擦 自治体と国際交流 世界の中の日本の役割 日本語学級の子どもたち	チャドウィック・アルジャー 辻 村 明 他 衛 藤 藩 吉 長洲一二、坂本義和 朝日新聞社編・刊 小 沢 有 作 編	日 本 評 論 社 日 本 評 論 社 弘 文 堂 学 陽 書 房 — 社 会 評 論 社
環 境 問 題	触まれる森林 収奪された地球 開発と環境 地球白書 緑の冒険 エビと日本人 沈みゆく箱舟 地球の未来を守るために	石 弘 之 H・グルール 淡 路 剛 久 ワールドウォッチ研究所 向 後 元 彦 村 井 吉 敬 ノーマン・マイアース 環境と開発に関する世界委員会	朝 日 新 聞 社 東 京 創 元 社 日 本 評 論 社 ダイヤモンド社 岩 波 新 書 岩 波 新 書 岩 波 現 代 選 書 福 武 書 店



石森 豊さん



ボランティア登場4

まず、JVC。最近はバザーを復活させようと頑張っています。以前は定住難民プロジェクトの機関誌『もしもしあのね』の編集をしたり、始まるまで待てないものプロジェクトのサッカー大会に参加したり映写会の企画もしました。そのほか挙げていくと限りがないという感じです。

サヘルの会。ご存じソマリアで大活躍した高橋一馬さんがアフリカの砂漠化を防ごうとしている会。

世田谷区・障害の垣根をはずそう会。障害児と健全児が交流する会とか。

そのほか、山谷問題、脱原発なんかににもかかわっていますから、「遊ぶ」暇がないというのがよく分かります。

● ボランティア活動を生活の一部に

「以前から、同じアパートにアメリカ人のボランティア経験者が住んでいたり、海外協力隊を育てる会に入っていたりして、興味はもっていたんだ。税田さんの講演会を聞いて、阿佐ヶ谷の事務所に行ったこともあるけど……。こんなに活発にやるようになった直接のきっかけは、JVCのオフィスが今の御茶ノ水に変わったことかな。それまではずいぶん遠かったけど、いまは会社とアパートの中間みたいなものだから。

そのころ会社が面白くなかったこともあるけど、こういう活動って、取り合えず楽しいんだよね。仕事場は、自分を出す場所はほとんどないでしょう。JVCにしても、他のところにしても、自分の意見というものが言えて、それなりのリアクションがあるよね。それが嬉しいんだ」

と石森さん。パントマイムに挑戦したりして、自分に対する見方も広がってきたとか。

「ボランティア活動を生活の一部にしたいんだ。ある時期だけやるというんじゃなく、一生やっていくプロジェクトをしたいと思うんだ。その活動を通して自分の生活、日本人の生活を見直すきっかけとなる……。そういったものをね」

これを読んでいるあなたも、石森さんと一緒に楽しんでみませんか。社会人としてごく普通の生活をしながら、細く長くでもJVCに協力する、そんな人がどんどん増えていくというのが、ぼくたち社会人組の共通した願いなんです。もしそうなったら、JVCも日本も変わる！と思いませんか？

編集部のMさんから話があって、今度のこの欄の登場者が石森さんだと聞かされたとき、すぐ考えました。一番最後は「花嫁募集中」で終わるのかな……。インタビューのため石森さんと会って、真っ先に話したのがそのことです。

「ね、よくやるみたいに、花嫁募集中ってやる？」

「ウン、探しているんだから書いといてよ」

と話がまとまりました。終わりに書くのはあまりにアリキタリなので、最初に書いてみました。

さて、その石森さんですが、1週間に2～3日はJVCのオフィスに顔を出します。代表の岩崎さんを除けば、若い学生や、専従のスタッフが多い男性陣のなか、石森さんと私は、中年(といっても40歳前ですが)、サラリーマン、ネクタイ姿という点で異彩を放っています。同年代として、服飾メーカーに勤めているサラリーマンの石森さんが、どんなきっかけで今のように活動的になったのか、私自身も興味津々インタビューをしました。

● 楽しくって遊ぶヒマがないよ

「いやあ、以前は会社と、飲み屋と、アパートの3角形を歩いていたけれど、最近は飲み屋がJVCの事務所みたいなのところになっちゃって……。もちろん酒は飲んでいるけれど、こういうところの人と飲むのはおいしいし、第一安上がりだよ。以前はもう少し高いところで飲んでいたけれど、いまほど楽しくなかったよ」

と話す石森さんは本当に、いろんな会に顔を出しています。おもなところをあげると…。

JVCプロジェクト

1988年6月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保, 林 達雄 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外、事業計画、情報収集、資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画、運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。 JVC説明会－毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時 神奈川新聞社の協力で、神奈川県を中心にエチオピアキャンペーンを行っている。新聞報道とあわせエチオピア・スタディツアーの勧誘を行った。6月22日は、JVC執行委員の秋山忠正氏とエチオピア担当の林達雄が講演を行った。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 6月18日「定住難民ボランティア・ハンドブック」(現在製作中)についてミーティングを開いた。このハンドブックは、今まで活動してきた人たちの経験やノウハウを新しく参加するボランティアに伝えるために作成している。9月中に完成の予定。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「チャリティ・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟	山口誠史, 落合正幸, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと、毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助(コレブを中心に) 昨年の大雨期に続き、今年の小雨期(3～4月)にも雨が不足し、家畜のエサとなる牧草すら生えて来ない。すでに9カ月間、人々はJVCから配給される小麦を炒って食べるのみである。今後人々の生存のために食糧配給を継続する予定である。 ●総合的復興促進 - 植林、土壌保全 昨年8月に山間部斜面や家の庭に植えた苗木は雨不足にもかかわらず、75%が枯れずに残り、70cmぐらいに育っている。 - 母子保健・栄養 家庭菜園、離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 - 給水 清潔な飲料水確保のため、泉の保護をしている。種子銀行、農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 西本願寺, チャリティ・サイクル, 東京グリーン・ウォーク, ジャパン・タイムス, モラロジー-MIRC, Tree for lifeの会, 栄光学園, 「チャリティ・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 犬養道子・みどり一本運動	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 Unit 10 はポンプ・ベースを造り終えた。また新農場Unit 11 の調査も終えた。双方とも約10ha、対象者は10家族である。 Unit 2～5の農民に対しては、自分たちでディーゼル燃料を購入するように通知した。 例年ほど雨が降らなかったのに、Unit 9の一部で雨による被害が出た。 モデル農場では、31名の婦女子を対象に家庭菜園の指導を始めた。 ●植林 2000本以上の苗木を配ったが、現在も約1万4000本の苗木を育苗中である。 ●現金収入 従来のものに加え、難民たちの中から新たに靴屋と肉屋の開業に伴う協力の要請を受けた。 ●コミュニティー・サービス 32人の難民の婦女子が自分たちで5000シリングを集め、JVCにマーケット建設を依頼してきた。現在準備中である。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ, ムハバ, アブドラヒ, アブディナサル
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	ルークでの経験とジャボレでの人間関係を生かしつつ、農民の自立のための農業を計画している。そのため現地での最終調査と、日本国内での資金調達を行っている。現在は40家族ほどが応募しているが、プロジェクトが順調に進み始めたら、徐々に受益者数を増やす予定である。		シュクリ
カンブチア (プノンペン) カンダール県 プレイベン県 (スバイリエン県)	●サンタビエップ技術学校 / ワークショップ 5月末にトラック5台分の交換部品が現地に到着し、6月半ばよりエンジンの組み立てが始まった。 ●井戸掘り / 給水 JVCのワークショップ内で2本、小学校で1本、井戸を掘っている。カンボット県で掘る井戸のうち17は予定地が決まったが他の20カ所は未定。 ●RINEプログラム(母子保健) 6月27日より村のヘルスワーカー・トレーニングが始まった。補助給食は、日曜日を除く毎日午前中に1回行われている。	創価学会青年平和会議, モラロジ・MIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティグループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ウォークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロブチミスト千代田	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬清, 本田徹, 釘村千夜子〔カウンター・パート〕, タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン(保健省), アン・サルン医師(カンダール県保健局), ニム・ニエム医師
ラオス (ビエンチャン)	●生活改善指導員養成センター 婦人を対象に母子保健, 幼児教育, 家政一般, 農業訓練等の一般知識修得並びに実習を教育省, 保健省の協力を得て行うセンターの運営援助および技術協力を予定。 センター開設予定は1989年1月。	木幡律子チャリティコンサート	谷山博史, 前田初江

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報，バザー，古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン，カモン・ミンムアン，スンニー・テイチャリヤクン
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 現在411人の若者たちが一気筒，単車，電気，自動車，溶接の各コースで技術習得に励んでいる。 タイ内務省はサイト2にいるクメール人の1部をノンサメットに移動させると発表した。 6月12日未明アランヤプラテートから国境沿いに15km先のバン・スック村にベトナム軍の破裂弾が落ち，村民2人が死亡，負傷者2人という被害があった。	UNHCR， SV (Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム，清水俊弘，大石道子
バナニコム （第三国定住待ち カンブチア難民村）	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み，書き，聞き取り） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。 6月15日カオイダンより29人のカンブチア難民が到着。20日から勉強を始めた。	天理教千葉	フォード・順子，鶴岡善和，山畑 匡 アナン・ブダミリンパティープ
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 家庭訪問を行っている。 ●クロントイ図書館 LOCK 6 および70ライという地区で図書活動を行っている。 ●地域調査 移動図書活動を拡大した都市貧困開発活動のための調査を開始。ワット・ラカン，ワンラン，ディンデンなどのスラムを調査した。 ●農村開発 農業プログラムをM村の小学校で始めた。	モラロジーMIRC， JOFIC， We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院 会 国際ソロプチミ スト駿河	バティット・チャンスリヤ オン，サムルアイ・ジョ ンヨークラン，リーラ・ クンナロン，コメン・ス ンサマラヤ 今泉 恵

JVCの現況（5月31日現在）

正 会 員： 758人

賛助会員： 45人

顧 問 栗野 鳳

執行委員 秋山忠正，伊従直子，岩崎駿介，岡本 厚
態岡路矢，小島通雅，ディブ・バスカビル
中田正一，星野昌子，本田 徹，室 靖

監査委員 武田昌邦，鷺津邦男

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。
また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りい
たします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (6月小計 22,000円) アフリ
カの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォア・アフリカ募金 (6月小計 520,000円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (6月小計 3,000円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (6月小計 1,032,500円) カンプ
チア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (6月小計 20,000円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (6月小計 66,000円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (6月小計 6,000円) タイの
農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (6月小計 3,000円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (6月小計 13,000円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (6月小計 82,000円) ラオス
の婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (6月小計 766,000円)

編集後記

▶色校正も終わり、もうすぐカレンダーができ上がる。今
回は評判のよかった2年前のアフリカチャリティカレンダ
ーに続く第2弾だ。アフリカというのは、人も風景もオブ
ジェとして凝縮してしまうが、アジアは良くも悪くも人
臭い。特に舞台となったタイ、ビルマ、カンブチア、ラオ
スはアジアモンスーン地域の仏教国ということもあり、日
本人には親しみ深い。

▶絵はがきのようにただ美しいだけのカレンダーではあり
ません。そこに生きる人々と暮らしのメッセージを吸んで
下さい。JVCを知らせるいいチャンスです。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (6月小計 735,185円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け
ることになりました。この募金はエチオピアの植林プロ
ジェクトに使われます。

昭和63年7月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ
ンタービル9F 財神奈川県国際交流協
会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。